

第21話（12頁） どろぼうの帽子

お百姓のところでお金がなくなりました。が、どろぼうを見つけ出すことができません。お百姓たちは集まって、お金をもっているのがだれなのか、どうしたらわかるだろうかと話しあいをはじめました。

ひとりのお百姓が言いました。

「どろぼうの帽子はもえあがる、という話だ。だいじょうぶ、今にどろぼうの帽子がもえあがるよ。」

ひとりのお百姓があわてて帽子に手をやったので、どろぼうであることが、みんなにわかってしまいました。

「人の物を盗んでも、誰が盗んだのか、すぐに分かってしまう。そういう例えとして載っているのだろう。短くて、筋立てもしっかりしている。」

「この話こそ、続きはどうなのかな。泥棒のお百姓はみんなから袋叩きにされたのか、あるいは裁判にかけられたとか。」

「違う、盗んでなんかない、たまたま帽子が風で飛ばされそうになったので押さえただけだ…。なーんて弁解したら、どうなただろうね。」（一同、顔を見合わせて笑う）

「すみません、もう二度としませんから許して下さい…。そんなふうに平謝りして、みんなから許してもらった。土下座したかもしれない。」

「その筋立てが一番自然というか、救われるよ。」

「だって、この泥棒、間抜けというか、随分と素直な人だよ。泥棒探しを提案した知恵者のお百姓より、愛らしく思えるほどだ。」

「出来心で盗んだのだし、初犯に違いない。すぐにばれちゃって、微笑ましい読後感さえ持ったね。」

「きっと盗んだ金額もたいしたことはなかった？」

「文中が全部、『百姓』ではなく、『お百姓』で通しているのも、そんな印象を強めている。」